

第13回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

第13回「東書教育賞」を受賞された先生方に、心からお祝いを申し上げます。

この「東書教育賞」は、東京書籍の創業75周年を記念して創設されたもので、昭和60年1月に第1回の募集要項が公表されました。

その後、この賞についての先生方の関心も年ごとに高まりまして、最近では評価もすっかり定着いたしました。今回の第1部「教科指導や学校経営に関する実践部門」の応募数は、小学校92編、中学校35編で、合計127編に及んだことがそれを物語っております。

今回の課題は、「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。募集要項では、これは今後の学校教育に課せられた重要な課題であり、「この課題にこたえるべく、小学校や中学校において実践された創意工夫ある教育活動の姿が具体的に記述された論文を公募」と述べております。このような趣旨による今回の課題が、学校教育における教育実践を通じて、どのように論述されているか、私たちは強い関心を持ちました。

論文の審査にあたりましては、

- (1) 実際の実践の結果に基づいて記述され、論じられているか（実践性）。
- (2) 実践の中にどのような創意工夫が見られるか（創意性）。
- (3) 特殊な実践ではなく、だれでも応用できるような一般化への手がかりがあるか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分になされているか（一般化）。

その他、論文として体裁が整っているか。例えば、テーマと内容が一致しているか。さらに発表の範囲や字数制限などを評価の基準として設定し、慎重な審査をいたしました。

今回の応募論文では、新しい学力観に立った指導が、すべての教科にわたってさらに工

夫され、強力に進められていることが読み取れました。

進行中の中央教育審議会や教育課程審議会での討議内容を、先取りする形での実践報告が数多くありましたのも、今回の特徴と云えましょう。例えば、総合学習への積極的な取組や教科間の関連を重視した合科的学習、地域社会との連携を重視した学習、体験的学習などが目立ちました。

論文を読んでいまして先生方のご熱心さと情熱に打たれ、いかにご苦労が多かったかが分かると同時に、優劣のつけ難い力作を審査することの難しさを感じました。

それらの中から審査の結果、第1部小学校の部で優秀賞2編、佳作3編の計5編を、中学校の部では優秀賞1編、佳作2編の計3編を選出しました。

小学校の部の優秀賞の一つは、新潟大学教育学部附属新潟小学校、永井高志先生の「意欲的に表現する子どもを育てる図画工作科指導」でした。先生は、3年生でそれをはぐくむには、題材に対して自分なりのイメージが持て、それを豊かにふくらませ、画面に満足のいくように表現できることだと考え、題材を身近な「ドン山」にとりました。ドン山は生活科でもなじみ深く、社会科単元「まちのむかしをみつけよう」の学習と関連づけて調べ学習を行い、地域の自然、風土、歴史を理解することによってドン山を主題とした自分なりの物語を創作し、その場面を絵画として表現させることにしました。

絵に表したいことがイメージ化できない子どもには「言葉のスケッチ」を活用して具体化を図り、また、「ラフスケッチ」を組み合わせ「アイデアスケッチ」を描くなどの工夫も試みています。さらにアイデアスケッチ

をもとにした子ども相互による「アドバイスカード」によって、表現を見直す機会を設けたことは、次の表現の段階に意見が活かされ、満足のいく作品につながっています。つまり、子どもが支援を自己選択できるように「支援カード」を作成し、子ども自身で解決できるようにした点も、たいへん参考になるところです。

「描く」という表現活動の前提として、「見る」「知る」の段階を丁寧に扱った意義は大きいと思います。全体として、個の発想、意欲の高揚と持続、完成の喜びを大切にしたい研究で、子どもが主体的に活動できる構造を持った優れた実践です。

もう一つの優秀賞は、千葉県安房郡富浦町立富浦小学校、桂幸一先生の『子ども先生型授業』の開発―地域教材で学び合う姿を求めて―です。先生は、これまでの6年生の歴史学習において、人物の生きざまに焦点を当てた教材でも実感を持って取り組むことが希薄であり、調べたり深めたりする段階での子どもどうしの学び合いの機会も薄く、意見が絡み合う場面が少ないという実感を持っていました。先生の論文は、「里見氏の興亡と天下統一」という地方史から中央を見た教材化を行い、課題選択グループを設定して授業を実践したものです。

特に「深める」段階では、調べたグループが中心になって、主体的にその課題についての授業を進めていく学習形態を取り入れています。そのためにT Tの役割分担を明確にして、授業を進行していくグループへの支援と学習者への支援をきめ細かく具体的に行っています。子どもが自分たちだけでは軌道修正できない場面での助言や、補足説明を要する場面での支援の仕方は適切であると思います。学び合いによる調査活動や体験活動は成就感を高め、里見氏のとった対処の仕方も「自分だったら」という視点で考えることができるようになってきています。

授業だけでは解決できなかった疑問や事柄を、自らめあてを持って夏休みの自由研究で調べることにしたのは、総合学習への目になると考えられます。

次いで、佳作の一つは、愛知県西加茂郡三好町立南部小学校、佐藤みちる先生の「生活科で培った力を生かす理科―4年『生き物のくらし』を通して―」であります。

総合的な学習への足らしと言われる生活科で培った力を中学年の教科学習に生かし、さらに伸ばしてやりたいという考えで、3年生、4年生と教育研究に取り組んでこられた先生は、4年生の理科の実践での計画と実践の成果を、まとめて発表されました。

「生活科で培った力」として、主体的な活動をする力、生活とのつながりで考える力、問題解決を進める力などの情意面をあげていますが、その具体的な成果として、「生活ノート」「飼育新聞作り」などから「育てた野菜を地域の農協のコンテストに出す」に至るまで、まことに多彩な活動を生み出し、実践しています。

この論文の真価はこれらの個々の指導事例の良さだけではなく、教科・領域を越えて他教科とのつながりを考えながら実践したという点であります。国語、算数、社会科などと意識的に関連を図っているのが目をひきました。

二つ目の佳作は、神奈川県秦野市立鶴巻小学校、矢嶋良和先生の「一人一人の思いを大切にしたい社会科における福祉教育の実践」です。福祉教育が叫ばれている中で、具体性のある授業実践は極めて少ないのが実情です。先生は「一人一人を大切にする政治」の単元で、思いやりの心を育てることを福祉教育ととらえ、実践に取り組みました。核家族化が進行する社会の中で、お年寄りに触れ合う機会は多くありません。そこでまずは自分の家族や身近なお年寄りの生活を調べることを契機として、聞き取り調査やお年寄りが不安に

思っていること、介護の問題などを通した高齢者社会への話し合い、介護の模擬体験など、指導上の工夫が見られます。

具体的な実践展開をありのままにつづってあり、失敗や修正点なども自ら指摘されていて、共感を持って読み取れる論文でした。福祉教育は身近なプライバシーを有する問題だけに、個別に子どもたちの心情を読み取り、適切な指導やアドバイス、配慮など、教師としての心構えが随所に見られます。先生の福祉教育に対する思いやあたたかみが、審査員の好評につながりました。

三つ目の佳作は、香川県坂出市立中央小学校、寺嶋俊秀先生（代表）の『『生きる力』をはぐくむ社会科・総合学習の構想と展開』であります。先生の論文は二つの実践よりなっています。一つは4年生の社会科・理科統合単元「生命の水一流水・名水・節水一」であり、もう一つは4年生の総合学習「久米通賢とふるさと坂出」であります。

第一の実践は、水をテーマにした新単元の構成で、児童に多面的な見方、考え方をはぐくむうえで有効に機能しています。学習活動も多様な活動を取り入れ、児童は充実した時間を実感していると思います。

第二の実践は、総合学習、学校経営の全体構想がよくできており、授業の計画性と広がりを読み取れます。また、どちらにも子どもたちの変容の様子が論述されています。

この他の論文にも、捨て難いものがたくさんありましたが、次回に期待することにいたしました。

私たちは審査の過程で、現場の先生方によって新しい学力観に基づく実践が着実に積み上げられ、指導の工夫が多様に行われつつあることを読み取ることができまして、頼もしく感じたいと思います。

なお、今回の応募論文につきましても、それがまずこの賞のために書き下ろされた論文であり、規定の総字数の枠内で資料類の処理

も適正になされたものであること、また、ご自分の主張が端的に示され、子どもたちの活動や変容の様子がよく描かれたものであることを、私どもは特に期待してやみません。

（執筆 奥田真丈）

第2部「コンピュータの学習指導利用に関する部門」は、全体では昨年より6点ばかり応募点数が増えておりますが、特に小学校での増加が目立ちました。これは、まず最初に中学校の理系からいろいろな試みが展開され、いちおう一段落がついて、小学校や他の教科へ実践的な活用が広がってきたというふうにも読めるかと思います。

教育課程審議会の中間まとめには、情報教育の推進という姿勢が大きく出ております。4点ばかり特色がありますが、一つは、総合的な学習の時間でコンピュータ系の情報手段の活用を推進すること。二つ目は、各教科でコンピュータ等を積極的に活用すること。この2点は第2部のねらいと一致しているところでございます。さらに情報教育の内容として中学校の技術家庭科に情報基礎がありますが、これを必修化すること。また、高等学校では新しい教科として情報を作ること。この四つの情報教育への推進方策が提言されており、たいへん心強く思っているわけです。

その際の情報を活用する能力を育成することを目標として、三つばかり内訳を示しておられます。情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度と、この三本柱がねらいになっているわけです。今回、事前審査を経て入選の候補とされた論文は合計11点ですが、そのかなりの部分が、今申し上げたような教育課程審議会の基本方針をふまえた内容の実践になっているように思われます。

第2部は、第1部の審査の観点にコンピュータの特性を生かした教科指導の活性化を図る実践の工夫が見られるかどうか、コンピュ

ータを利用する教育の輪を全国的に広げていけるような参考になる論文であるかどうかという観点を加えて、審査をさせていただきました。全体の11点の特色は、各教科にわたって非常に幅広い活用がなされているということでございます。例えば校内ネットワーク、インターネットの活用、データベースを作る、ソフトを使う、あるいはゲームであるとか、教科の問題を自作するとか、多様なメディアの活用ということで、その結果、優れたものがたくさんございました。その中から優秀賞、佳作それぞれ1点ずつを選ばせていただいたわけでございます。

小学校の優秀賞は、三重大学教育学部附属小学校、嶋田浩先生の「コンピュータを用いた統合的・横断的学習『宝物までたどりつけ』」です。題名にも統合的・横断的という言葉が入っておりますように、これは情報と算数を中心とした総合的な学習と私どもは受け止めました、その貴重な実践でございました。

2年生の子どもたちに、コンピュータのお絵描きソフトを使って算数の問題作りをさせます。その問題は友達が決めますので、よく分かるような文章を書かなければならない、表現もしなくてはならない、こういった注意をしながら子どもたちが作ります。最終的に宝物に行くのに空コース、山コース、海コースというものがありまして、海コースでは魚が題材になった問題が出てきたりするわけですね。宝箱を開けると表彰状がパッと出てくるというようなことで子どもたちが喜ぶ。そういう心憎い手立ても講じていらっしゃる。

この実践の一番のポイントは、子どもたちが問題を作るということです。人に解いてもらうように上手に作る、分かりやすく作る、それを友達が解いて、ここが分かりにくいから直して欲しいと指摘する、直したものをもう一度みんなで解き合うというような形です。このようにコンピュータを道具として、子ど

もたちの主体的な創造的な活動がみごとな展開をしている。子どもたちは問題を作る時、色とか、形とか、構造とかいろいろ考えてやっているわけです。こうした点から総合的な学習を通して、子どもたちが自分を伸ばしていく、いい道具としてコンピュータが使われている点が評価されました。

小学校の佳作は、東京都北区立堀船小学校、手代木英明先生の「インターネットを活用した『5年 天気の変わり方』の学習」です。これは、まず区内の四つの小学校の児童と先生に天候に関するアンケートを実施する、ということから始まります。

現在、日本中には定点観測カメラが86箇所ありまして、その映像をインターネット上に公開していますので、その場所の空や雲の様子が教室にいながらにして分かります。それと、百葉箱を観測したデータや屋上で観察した空の様子などを総合しまして、天気学習・気象学習をするわけです。そして事後のアンケートをして、子どもたちがどういう変容をしたかということもおさえています。コンピュータの特色を生かして、全国の情報とローカルな情報とを総合するという、コンピュータのネットワークの効果を生かした実践であったという点が評価されたわけです。

このほかにも、いろいろ印象に残る論文がございます。例えば滋賀県草津市立老上小学校の中野正俊先生。これはデザインがすばらしい。問題の収集の段階と表現の段階に分けてメディアを上手に使って、その前後の効果を比較されています。東京都目黒区立下目黒小学校の秋田敏文先生、漢字なぞなぞや否定の熟語のクイズを子どもたちに作らせて、コンピュータに入れて、他の子どもたちに解かせるというような実践でございました。

こうしたすべての実践を通して、私どもは、総合的な学習に向かったのコンピュータ利用というものが位置づき始めた、各教科の中で上手に活用され始めたということを感じまし

た。特に発信する学びといいますか、子どもが情報を発することによって学んでいく、そういう指導が充実して行われ始めているということを、つぶさに感じさせていただいた。子どもたちの学習が、受ける学び・受け身の学習から、作る学び・発する学びへと変わってきているということを感じたわけでございます。

次回以降への期待としまして、自分の実践したことをできるだけ多く具体的に書き込んでいただきたい。学者の意見の引用であるとか理論的なものはなるべく減らして、実践の前と後につけ加える程度にしていいただければたいへんありがたい。また、たくさん実践例がある場合に、それを全部並べますと分散してしまい印象が薄くなりますので、一つとか二つとか絞って書き込んでいただいたほうが、読ませていただく時に子どもたちのイメージがわいてきます。今後とも、情報活用能力を生かすような形の実践の論文が、続々と応募されることを期待いたします。

(執筆 坂元 昂)

審査委員の所感要約

(薩日内信一) 第1部の実践論文を読ませていただいて特に感じましたことは、どの論文もしっかりとした組み立てになっているということです。そして、何回も読み直してみると、その論文の言葉の一つ一つから、子どもの生き生きとした活動の様子が目に浮かんできました。また、論文を通しまして、先生方が子どもたちの学習者としての主体性を工夫して、これからの学習を自ら考えたり、あるいは自ら学んでいく姿勢をつけようとなさっている、そういう教育への情熱が伝わってきました。さらに、一つの教科だけにこだわっているのではなくて、もっと積極的に他の教科との関連を図ろう、あるいは他の教科で学んだものを生かしていこうという姿勢が伝わってきました。知の総合化というようなこと

が言われておりますが、積極的に他教科や領域との関連を図りながら、生きた知恵を子どもたちに身につけさせていこう、そして総合化していこうという印象を強く持ちました。

中でも特に心に残りましたのは、優秀賞の永井高志先生が取り組まれた実践です。この論文の特徴は、一つは子どもの制作への意欲、子どもの思いをいかに高めるかというところに主眼を置いて、実践研究に取り組まれているところです。そして、描きたいなという気持ちを育てるとともに、その段階での細かな配慮によって、それをさらに広げよう、あるいは深めようとしている点です。先生はふくらませる、あるいは広げていく手法を、さまざまな技法で表現しておられました。

例えば、「言葉のスケッチ」を設ける、あるいは「ラフスケッチ」、「アイデアスケッチ」等、スケッチをまず基にして構成していく。さらに「アドバイスカード」、「支援カード」、「鑑賞カード」という細かなカードを活用して、その透き間を埋めていこうとする。そしてさらに先生自身の診断評価指導に役立つカルテというものを活用し、子どもたちの制作意欲あるいは取組の主体性、そういうものを確立した実践でした。また、社会科との関連を基に図画工作科の指導を進めていった点は、たいへん意欲的にも感じました。

これからは、子どもたちの生きる力をはぐくむということが大事な要素として指摘されております。そしてその要素として欠かせないのは、学習主体者としての個の確立をどうするかという点と、友達とともに学ぶ力をつけていくという点にあるのではないかと思います。今回の先生方の実践論文は、そういった意味で時代を先導するものではないかというふうに、私は読ませていただきました。

(杉山吉茂) 私は第1部の審査をさせていただいて、全体的に見てこういうことを思いました。「実践もとても立派だな。書いてある

こともとてもいいことが書いてあるな。でもそのまとめ方が残念だな。」と。こういう論文が結構あったように思います。役に立つ資料としては、データがたくさんあってアイデアもたくさんあったほうがいいですし、そういう意味で評価したいと思うのですが、何となく、とりとめもなくたくさん資料が集まっている。そういうようなものがいくつかあって残念だということを思いました。何かポイントを決めて、そして価値が分かるように書いていただけると、皆さんにも分かっていたのだのではないかとと思っています。

その点、今回入選した論文は、どれもアイデアの面でも実践の面でもよくできているし、よくまとまっていたと思います。とてもいい実践で私もとても勉強させていただきました。

(多湖 輝) 私、千葉大学の附属小学校の校長を5年ほどやらせていただいて、現場のことを多少知っております立場から申し上げますが、あの忙しい中で先生方がこうやって実践論文を書いて応募されるということに、毎回とても感心させられます。今年は、どういうわけか、女性がお一人しかおいでになりませんが、いつも女性優位の状態だったような気もいたします。今回、男性がこれだけがんばってくださいということに、非常に嬉しく思っております。

論文を読ませていただいて、たいへんよく工夫をしておられるし、これなら子どもが喜ぶだろうなというような感じを持って、評価させていただいておりました。とにかく泣かせる論文というのがあるんです。私は涙もろいほうだからそうなのかもしれませんが、読み始めたら眠気も何も飛んでしまって、最後まで読まされて、ここまでやっている先生があるかという感動を受ける。私も子どもの時にこんな先生についていたら、また違ったんじゃないかというような、そういう思いを感じさせる論文というのがあります。です

から、内容は十分ですから、もう少しまとめ方をうまく、審査員をみんな泣かせるような論文をお書きになれば、最優秀賞が続出する状態になるのではないかとそんなふうにも思います。

とにかく、教育界にはいろいろな問題がまだまだございます。ポケモンの問題で、船橋市のある学校で番組を見た子どもの調査をしたら、1年から4年までは90数%、6年生で少し落ちていて87%ぐらいですから、ほとんど全員が見ている。そこでは数名の被害が出たそうですけれども、とにかくテレビはすごい影響力を持っています。

それから、中学校の先生方が集まる会で講演する機会があったのですが、その時に校長先生方とお話していたら、現場はまたちょっと荒れてきましてという話ができました。これは全部ではなくて一部なんでしょうけれども、先生が中学生に殴られるのだそうです。相手は先生が暴力を使わないことを知ってやる。マスコミは先生が生徒を殴ると大事件のように書き立てるけれど、先生がこれだけ殴られていても何も書いてくれないというのはけしからん、という話を聞きまして、ちょっと心配になったりしました。中学の先生方、特に体力を鍛えてがんばっていただきたいと思います。

(寺崎昌男) 最近、私感じていることがいくつかございます。一つはあちらこちらで講演をさせてもらう時に、以前は小・中学校の先生方に大学の話をするということはあまりなかった。それから大学の先生方への講演の時に、小・中学校の話をしても関心を持たれなかった。ところが最近違います。どちらで違う所の話をしても、関心を高く持ってください。大学の先生に、特に小・中学校の教育がどう変わろうとしているか、何が問題かという話をすると、昔はそんなこと全然聞いてくれなかった人たちがよく聞いてくれるんで

す。なぜかというのは、非常におもしろい大事なことだと私は思っています。

二番目は、日経連が3年前に『新時代に挑戦する大学のあり方と企業の対応』という報告書を出しました。また、昨年は『グローバル化に対応する教育のあり方』という報告書を出しています。これらを通して読んでみると、やはり広い規模で、新しい能力とは何なのか、新しい感性はどう作っただろうかということについて、言わば産業界も含めて大きな問いにさしかかっているように思えます。

最後にもう一つつけ加えますと、審査に当たりました中央教育研究所で、昨年7月から8月にかけて、総合的な学習をなさっているところの全国四つの小学校の先生のお話をうかがいました。そこで分かったことで非常に印象的なことがございました。それは、総合的な学習を先駆的になさっているところで、「ああ、うまくいった。」と思えたのはいつかということです。先生方が自分の教科の中で、そのテーマに合うのはこういう内容だから持ち寄ろうなどとやっていた間は、絶対にうまくいかなかった。うまくいったのは子どもたちに任せようと、課題を発見するのも子どもたちだと、そこまで信頼しようと腹をくくった時に、初めて総合的な学習が生き生きと動きだしたとおっしゃるんです。

そういうような事を考えさせられている目で今回の先生方の論文を読ませていただきました。このそれぞれのテーマと内容の中に、ここには「信頼された子どもたち」がいるということ、教科を越えて新しい力を作りたいという意欲が通っているということを、強く感じました。

(赤堀侃司) 私は初めて第2部の審査に出席いたしましたので、感想めいて述べさせていただきます。まず、優秀賞の嶋田先生の論文を読ませていただいて、子どもが問題を作る

ということの大切さ、ならびに自分の言葉で表現することのすばらしさが分かり、たいへん感心いたしました。やはり、子どもが自分でやっていかないと本物にならないだろうと思います。その道具がコンピュータであったということ、改めてこの論文を読んで勉強させていただきました。

それから、天気の変り方の手代木先生の論文も、非常におもしろいと思いました。天気予報をさせるというところがポイントです。これまでは、どうやってうまく理解させるかということに、いろいろなメディアや教育方法を作られてきたと思うのですが、予報までいかないと本物ではないと思います。予報ということは正に情報発信であり、主体的な活動です。自分で予報できる、それがどのくらい明日の天気で当たっているか。予報するためには情報がいります。全国の情報を取って来なくてはいけない。それでインターネットを活用していくということがうまく結びつけられているということで、よい実践だと思います。

全体的に、こういった優れた実践をもっともっと掘り起こしていかなければいけないというのが私の感想です。参加させていただいて、勉強させていただきましたことを、お礼申し上げたいと思います。

＊なお、第13回東書教育賞審査委員、高泉康雄氏は、第1部の論文審査を行いました。表彰式には都合により欠席されましたため、所感の掲載はありません。また、同じく審査委員、佐野金吾氏の所感、中学校の論文集に掲載いたしました。